

尼崎の森中央緑地のあり方検討について（案）

1 県立都市公園のあり方検討

明石公園での整備等について多くの意見が寄せられたことを踏まえ、自然環境保全や活性化のあり方にかかる検討を行うため、令和4年度に「県立都市公園のあり方検討会」を設置した。令和6年3月に当検討会で提言がとりまとめられ、県では、当提言を踏まえて、令和6年5月に「県立都市公園の整備・管理運営方針」を策定し、全県立都市公園において、順次、自然環境保全と活性化のあり方にかかる検討を実施している。

[あり方検討での基本の検討項目]

県立都市公園のあり方検討会の提言で提案された検討事項を基本としつつ、各公園の特性に応じた事項を設定し検討。

自然環境保全

- ①ゾーニング図の作成
- ②実際に樹木伐採を行う際（計画策定前段階）の合意形成のルール設定
- ③樹木伐採に関する情報発信（工事着手前段階）のルール設定

活性化

- ①管理運営協議会等の拡充
- ②公園のさらなる利用、参画を促す取組・仕組みの検討
- ③「新たなパークマネジメント手法（民間活力導入）」を導入する際のルール設定
- ④公園施設の新設、改廃に関する合意形成のルール設定
- ⑤情報共有マネジメントの検討

2 尼崎の森中央緑地のあり方検討

あり方検討は、県立都市公園の管理・運営に、県だけでなく、地元住民や自治体、有識者など幅広い関係者の意見を反映させることを目的としている。

尼崎の森中央緑地は、「尼崎 21 世紀の森構想」のリーディングプロジェクトとして整備され、「ひとりひとりの参画により「地域が育てる森」をつくり、人々が自然の恵みを楽しむ「地域を育てる森」とする」ことを基本理念として、開園当初より、行政、県民、企業等がともに森づくりに取り組んできている。

あり方検討での検討項目である「自然環境保全」「活性化」についても、市民、企業、各種団体、学識者等からなる「尼崎 21 世紀の森づくり協議会」での森づくりの方向性や方策等にかかる協議に含まれており、すでに検討がなされていると考えられることから、尼崎の森中央緑地では、改めての「あり方検討」は実施せず、現在の取組みを継続する。

自然環境保全

基本計画（平成 16 年）、植栽計画（平成 18 年）、整備計画（平成 27 年）を策定し、緑化技術検討会の技術的・専門的な視点からの指導・助言を踏まえながら、森づくりに取り組んでいる。

（参考 1）目標林型（令和 6 年度末時点）

（参考 2）目標植生別の管理目標と中長期の管理計画（令和 6 年度末時点）

活性化

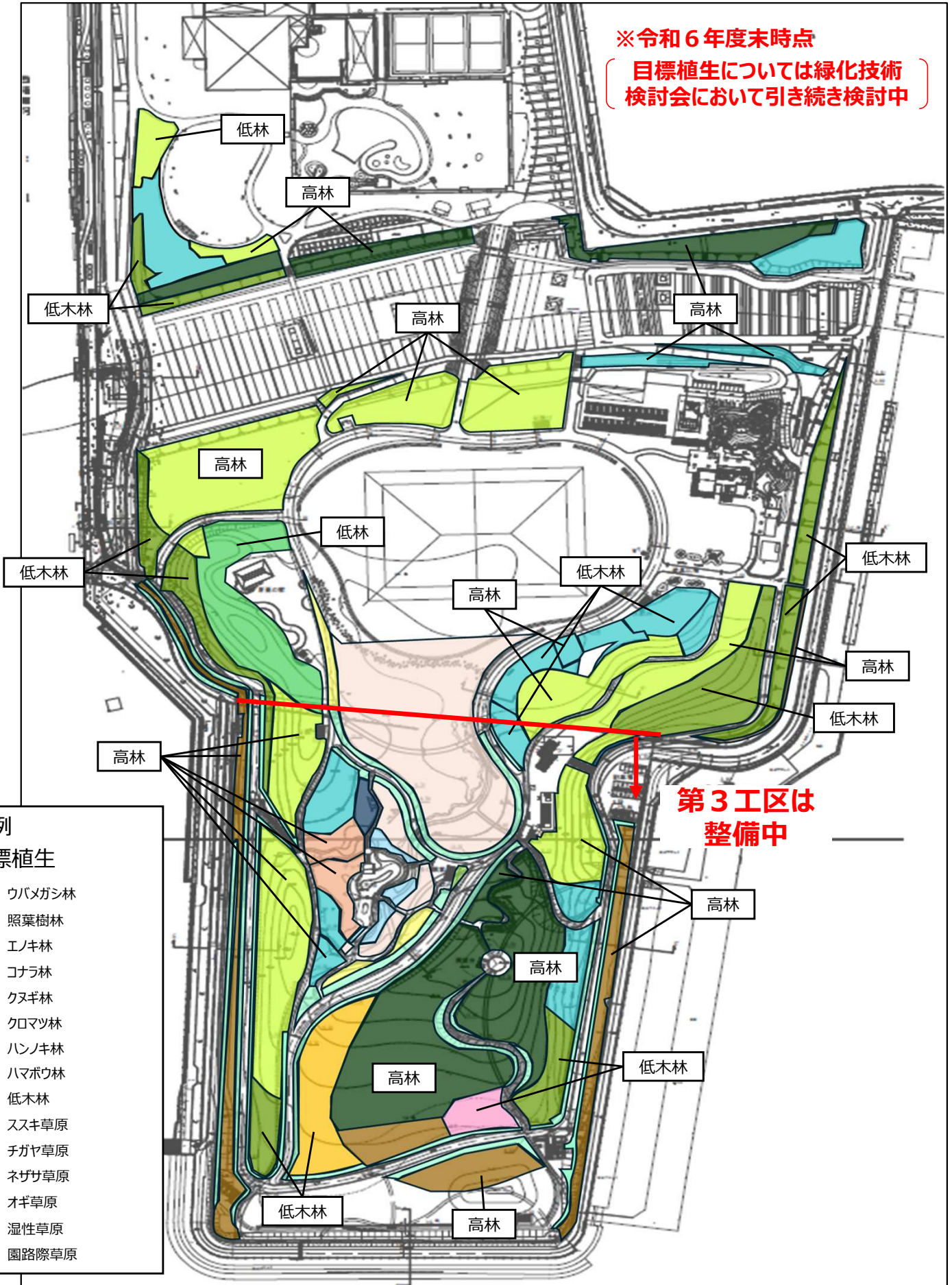
「尼崎 21 世紀の森づくり協議会」において、尼崎 21 世紀の森構想の理念を実現するための取組みの方向性を示す「尼崎 21 世紀の森づくり行動計画」を策定し、随時見直しを行いながら、これを指針として、市民、企業、行政などあらゆる主体が自主的に、連携・協力して取組みを進めている。

【参考1】現状の目標林型 (緑化技術検討会資料)



※令和6年度末時点

〔目標植生については緑化技術
検討会において引き続き検討中〕



凡例 目標植生

- ウバメガシ林
- 照葉樹林
- エノキ林
- コナラ林
- クヌギ林
- クロマツ林
- ハンノキ林
- ハマボウ林
- 低木林
- ススキ草原
- チガヤ草原
- ネザサ草原
- オギ草原
- 湿性草原
- 園路際草原

【参考2】目標植生別の管理目標と中長期の管理計画 (緑化技術検討会資料)



※令和6年度末時点
(緑化技術検討会において引き続き検討中)

区分	目標植生		説明	管理方針 (中長期)
	群集・群落名	一般名称		
照葉樹林	コジイ カナメモチ群集	照葉樹林	【A】尼崎の森中央緑地の中核となる森 ・太古の森、公園のシンボル。	・適宜、間伐による密度管理を実施し、目標植生へ誘導する。 ・低木や草本を積極的に導入し、生物多様性豊かな照葉樹林を目指す。
	ウバメガシ トベラ群集	ウバメガシ林	【E】防風、防潮などを目的とした緩衝林 ・海に面した斜面地に成立する低木林。	・適宜、間伐による密度管理を実施し、目標植生へ誘導する。 ・外部環境からの緩衝林として位置づけられることから、間伐強度は低く設定し、密生状態を維持する。
	コナラ アバマキ群集 (高林)	コナラ林	【B】生物多様性豊かな夏緑樹林 ・低林と対比させた高林エリア。 ・樹林観察などの環境学習に活用。	・適宜、間伐による密度管理を実施し、目標植生へ誘導する。 ・低木や草本を積極的に導入し、生物多様性豊かな夏緑樹林を目指す。 ・照葉樹の侵入を確認した場合は、実生の段階で除去する。
夏緑樹林	コナラ アバマキ群集 (低林)	コナラ林低林	【C】参画と協働による森林資源の循環利用を体験できる里山林 ・かつての一般的な里山林をモデルとした薪炭材の供給を目的とした低林。 ・10～15年に1回程度、皆伐更新を行う。	・適宜、間伐による密度管理を実施し、目標植生へ誘導する。 ・10m程度に育成した段階で皆伐し、萌芽更新させる。 ・樹高を抑制することで、間伐、伐採ともに人力施業が可能となり、参画と協働による維持管理の継続を目指す。 ・照葉樹の侵入を確認した場合は、実生の段階で除去する。
	クスギ ニシホンモンズグ 群落	クスギ林 (台場クスギ林)	【C】参画と協働による森林資源の循環利用を体験できる里山林 ・北摂の「台場クスギ林」をモデルとした薪炭材の供給を目的とした低林。 ・10年に1回程度、皆伐更新を行う。	・10m程度に育成した段階で皆伐し、萌芽更新させる。 ・伐採の際は北摂の台場クスギ林をモデルとした台場仕立てとする。 ・樹高を抑制することで、間伐、伐採ともに人力施業が可能となり、参画と協働による維持管理の継続を目指す。 ・照葉樹の侵入を確認した場合は、実生の段階で除去する。
	ガマズミ ウツギ群落	ガマズミ ウツギ林	【D】各種の花、訪れる生きものなどから生物多様性を実感できる低木林 ・花や実を楽しめる低木類からなる樹林。 ・森の魅力や多様性を高める。	・適宜、間伐、除伐を行い、目標植生へ誘導する。 ・目標林構成種以外の種の侵入を確認した場合は、実生の段階で除去する。
常緑樹林	エノキ ムクナギ群集	エノキ林	【B】生物多様性豊かな夏緑樹林 ・野鳥、チョウ類(昆虫類)の誘致。 ・多様性の高い空間として、環境学習に活用。	・適宜、間伐による密度管理を実施し、目標植生へ誘導する。 ・低木や草本を積極的に導入し、生物多様性豊かな照葉樹林を目指す。 ・照葉樹の侵入を確認した場合は、実生の段階で除去する。
	ハンノキ群落	ハンノキ林	【B】生物多様性豊かな夏緑樹林 ・過湿地に成立する樹林。 ・ミドリジミなど、特徴的な生物が生息し、生態系の多様性を高める。	・適宜、間伐による密度管理を実施し、目標植生へ誘導する。 ・低木や草本を積極的に導入し、生物多様性豊かな照葉樹林を目指す。
	タラノキ クサイチゴ群集	先駆林	【D】各種の花、訪れる生きものなどから生物多様性を実感できる低木林 ・伐採跡などへ先駆的に成立する樹林。 ・野鳥や昆虫類の幼虫の餌となる植物が多く生息し、生態系の多様性を高める。	・放置すると植生遷移の進行により、先駆種が衰退するため、先駆種の優占状態が維持できるとともに他の目標林構成種が優勢になる場合は除伐する。
環状 樹林	クロマツ群落	クロマツ林	【F】瀬戸内海を代表する白砂青松の景観形成 ・運河に面した、緑地の外周部に導入。	・適宜、間伐による密度管理を実施し、目標植生へ誘導する。 ・松原の景観を形成するため、下草刈り、落ち葉かきなどを実施する。